

## 集会報告 : SPARC Digital Repositories Meeting 2008

著者	金藤 伴成
雑誌名	情報管理
巻	51
号	11
ページ	833-836
発行年	2009-02
権利	(c) Japan Science and Technology Agency 2009
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/101680">http://hdl.handle.net/2241/101680</a>

doi: 10.1241/johokanri.51.833



## SPARC Digital Repositories Meeting 2008<sup>1)</sup>

**日程** 2008年11月17日(月)～18日(火)

**場所** Renaissance Baltimore Harborplace Hotel (アメリカ メリーランド州ボルチモア)

**主催** Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition (SPARC), SPARC Europe, SPARC Japan

**スポンサー** Microsoft, The Berkley Electronic Press, Data Conversation Laboratory, eprints, Open Repository, Bremmer & Goris, CARL, The University of Alberta Libraries

**後援** ACRL, ARL, Canadian Research Knowledge Network, The DSpace Foundation, Fedora Commons, Greater Western Library Alliance, HP, 国公立大学図書館協力委員会, JISC, NISO, PALINET, SOLINET, SUN Microsystems, Inc., VTLS

### 1. はじめに

SPARCは学術研究成果のオープンアクセス推進などを目的として1998年に設立された国際的組織である。2004年にリポジトリに関する国際ワークショップを開催しており<sup>2)</sup>、今回のミーティングは4年ぶりとなる。ボルチモアの会場には図書館員、研究者、ソフトウェア開発者、出版関係者など10か国から約330人が集まった。

なお、今回はSPARC, SPARC Europeとともに国立情報学研究所 (NII: National Institute of Informatics) が推進するSPARC Japanが主催者に加わった。

を中心とした学術世界の光景について議論し、ペンシルベニア大学のShawn Martin氏はIRをバックボーンとして、研究者個人のページを作るサービスを通じた大学教員との連携強化について述べた。

ハワイ大学大学院のJennifer Campbell-Meier氏はアメリカ・カナダで6つのリポジトリに関わった経験から、図書館が「積極的な出版者」(a proactive publisher) になるために、関係者に対するストーリーテリングが重要であることを説いた。

#### [Developing Value-Added Services]

このセッションでは金沢大学附属図書館の内島秀樹氏が発表し、デジタルリポジトリ連合 (DRF:

### 2. 各セッションの様相

#### [Opening Keynote]

初日はScience CommonsプロジェクトのJohn Wilbanks氏の基調講演で始まった。セマンティックウェブによって内容同士を結びつければ、リポジトリのデータやコンテンツは孤立した存在ではなくると同時に、当初想像していなかった形で利用、あるいは再利用されると同氏は述べた。

#### [New Horizons]

ジョンズホプキンス大学のSayeed Choudhury氏はThe Sloan Digital Sky Surveyなどの事例からデータ



写真1 講演する内島氏

Digital Repository Federation) の活動の他, iPS細胞の山中論文やノーベル賞の益川・小林論文を適時にIRに搭載した京都大学の事例, OA documentsをリンクリゾルバ経由でアクセスしやすくするAIRWay, IRへの搭載で国内雑誌のILLが減少した事例, リポジトリアクセス統計の標準化などを紹介した。

この他, Joan Giesecke氏とPaul Royster氏からネブラスカ大学のリポジトリ構築について, コンテンツの入手からスキャン, タイプセットまで徹底して行っている様子が紹介され, Norbert Lossau氏からはEUで展開するDRIVERの幅広い事業の紹介とともに, 日本のデジタルリポジトリ連合 (DRF) との連携 (後述) について言及があった。

#### [Reception & Innovation Fair]

初日最後にはレセプションが開かれた。また, この中でInnovation Fairと名付けられた各大学・プロジェクトの活動を2分間でプレゼンするセッションが設けられ, 筆者を含む20組が発表した。筆者は筑波・千葉・神戸・東京工業の4大学が共同構築している学協会著作権ポリシーデータベース (SCPJ)<sup>3),4)</sup>を紹介した。

発表時間は厳しく守られ, 持ち時間が過ぎてしまうと途中でも主催者から止められてしまう。このため, 悔しがったり, 最後に言いたいことを叫ぶ人がいて会場は沸いた。各発表の概要とスライドはミーティングのSNS<sup>5)</sup>からアクセスできる。

#### [Policy Environment]

2日目は各国・地域の政策についてのセッションから始まった。千葉大学の土屋俊教授は4年前の同じ日 (2004年11月18日) に講演した自身のスライドを引用しながら, 国内のリポジトリの増加, JAIROや地域共同リポジトリの出現などこの4年間に日本で起こった変化について述べるとともに, NIIのCSIプログラムによる助成で日本の大学図書館のコミュニティーにこれまでとは違う新しい文化が醸成されていることを紹介した。



写真2 講演する土屋教授

このセッションでは他にSPARC EuropeのDavid Prosser氏が, 2000年にEUが出した宣言や, 2003年のベルリン宣言など公にされたポリシーが学術コミュニケーションに大きな影響を与えていること, 理想的なエンバゴは0か月, 即時のオープンアクセスが目標であることを述べた。

#### [Campus Publishing Strategies]

Rea Devakos氏はOnline Journal Systemsなどカナダの21大学が共同で開発しているPKP (Public Knowledge Project) の報告を通じて, 図書館が出版に関わる際のベネフィットや大学間の共同開発の利点と難しさについて述べた。

Catherine Mitchell氏は, 多くのキャンパスを持つカリフォルニア大学で, 学術論文だけでなくモノグラフやワーキングペーパーなどをeScholarship Repositoryに収めて大学全体の可視性を向上させるまでの取り組みを発表した。

Teresa Fishel氏とJanet Sietmann氏は学生数約1,900人と比較的小規模なマカレスター大学での経験から, リポジトリが学生を含む研究のショーケースになりうること, また大学の規模にかかわらず図書館はキャンパスにおける出版者という新しい役割を担うことができることを主張した。

#### [Marketing Practicum]

このセッションでは, 化学・経済学・人類学な



写真3 Marketing Practicumにおける各テーブルのディスカッションの様子

どテーブルごとに分野が決められ、各分野の架空の人物プロフィールを基にどのようにリポジトリをプロモーションするかという課題が与えられた。

まず、その人物の学術コミュニケーション上のニーズと目標を規定し、それに対してリポジトリがどのように応えられるかを討議する。続いて自分たちのポジショニングステートメントを書き、その内容をテーブルごとに発表した。

この演習型のセッションは、ここ数年の学術ポータル担当者研修（NIJ）の共同討議などと共通する部分があると感じた。

#### [Closing Keynote]

締めくくりの基調講演でDavid Shulenburg氏は、リポジトリへの強いサポートは学術情報を必要とする人に対して最も効果的に届ける方法だとしたうえで、リポジトリに関して学内の各所と共同して仕事をする事、登録義務化を含めた研究の知的所有権の議論など、リポジトリを次のレベルに進めるための7つのステップを提案した。

### 3. 会場から

両日ともスポンサーから朝食・昼食・ブレイクが提供され、これらの時間に世界各地から集まった関係者同士の自由な意見交換が行われていた。



写真4 覚書に関して協議するDRIVERとDRFのメンバー。  
左からLossau, Dale Peters, 内島, 土屋の各氏

会場の一角では、EUのDRIVERと日本のDRFとの間で協力関係締結の覚書について協議が行われた。この協議はミーティング後の2008年11月25日に「DRIVER / DRF間の了解事項の覚え書き」<sup>6)</sup>として実を結び、世界へ向けて公表された。

### 4. おわりに

ミーティングに参加して、変革期にある学術コミュニケーションにリポジトリがどのような影響を与えるのか、またその相互作用としてリポジトリ自身がどんな方向へ新たな一歩を踏み出すのかという文脈で各事例をとらえると面白いと感じることが多かった。SPARCが主催する次のミーティングまでに内外でどんな動きがあるだろうか。今から楽しみである。

#### [謝辞]

本ミーティングの出席にあたってInnovation Fairへのプロポーズを執筆した斎藤未夏氏をはじめとする筑波大学附属図書館の皆様、SCPJプロジェクトの皆様、日本からミーティングに参加した皆様にお世話になりました。また、参加費用にはNIJの平成20年度学術機関リポジトリ構築連携支援事業委託費を用いました。厚く御礼申し上げます。

(筑波大学附属図書館情報管理課 金藤伴成)

## 参考文献

- 1) “SPARC Digital Repositories Meeting 2008” . SPARC. <http://www.arl.org/sparc/meetings/ir08/>, (accessed 2008-12-10).
- 2) “Institutional Repositories The Next Stage” . SPARC. <http://www.arl.org/sparc/meetings/ir04/ir04.shtml>, (accessed 2008-12-10).
- 3) Society Copyright Policies in Japan 学協会著作権ポリシーデータベース. <http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/scpj/>, (accessed 2008-12-10).
- 4) 富田健市, 斎藤未夏, 平田完. ごぞんじですか? SCPJ. 専門図書館. 2008, no.228, p.45-49.
- 5) SPARC Digital Repositories Meeting 2008. INNOFAIR presenters (CrowdVine). <http://sparc08.crowdvine.com/questions/show/19836?tag=INNOFAIR>, (accessed 2008-12-10).
- 6) “Cooperative relationship between DRIVER and DRF” . Digital Repository Federation. <http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?Cooperative%20relationship%20between%20DRIVER%20and%20DRF>, (accessed 2008-12-10).